

フィリピン支援への第一歩

～支援の輪を広げる～

川崎 拓実 (中等保健体育・3年) 他 学生9名 教員1名 事務職員1名

1. 活動概要

(1) 背景

私たちは、昨年の3月に多文化体験活動でフィリピンのセブ島を訪れた。活動の中で、「スラム」と呼ばれるゴミ山や墓地で生活を送る子どもたちと交流をしたり、山村集落で暮らす大学生から様々な話を聞いたりした。この経験から、「リゾート地」のイメージが強いセブ島においても、今もなお深刻な貧困問題が残っていることを知り、私たちだけが限られた人数で支援を行うのではなく、より多くの方に一緒に支援をしてもらいたいと考えた。

(2) 目的・活動内容

「多くの方にフィリピンの現状について知ってもらい、支援の輪を広げていく」ことを目的とし、主に次の2つに取り組んだ。

①フィリピン人大学生の招聘

多文化体験活動で交流した、山村集落で生活を送る大学生 Sheilaさんを日本に招聘し、講演や日本の文化体験などをしてもらう。

②支援物資の収集

講演会開催後に、学内で支援物資を集め、セブ島の山村集落に送る。

2. 実施状況

目的である「支援の輪を広げる」を達成するために、まず11月に講演会を開催し、フィリピンの現状を多くの方に知ってもらった。その後1,2月に支援物資の回収を行った。

①フィリピン人大学生の招聘

(1) 講演会の開催

11/27(水)に招聘した大学生 Sheilaさんと CEC ジャパンネットワーク株式会社(以下 CEC)代表の池頭稔氏による講演会を開催した。

Sheilaさんは「フィリピンで私が歩んできた道」というテーマで、かつてストリートチルドレンとして苦しい生活を送っていた時代に学校でいじめを受けていたことや大学に通っている現在でもまだ多くの困難を抱えて生活をしていることを時折涙を浮かべながら語ってくれた。

池頭氏からは「フィリピンの現状について」という題目のもと、フィリピンの教育制度や貧困状況、それに対する政府の対応などについて写真や映像を交えながら詳しく説明していただいた。また、CECとして池頭氏らがこれまで行ってきた具体的な支援活動やその成果についても話をいただき、「支援とは何か」ということを考えるきっかけになった。



講演会宣伝ポスター



講演会の様子

(2) トヨタ工場見学

フィリピンから出稼ぎのために日本に来る人も多くいることから、日本の企業の働き方を知るためにトヨタ自動車の元町工場を見学した。ガイドの方の説明を聞きながら自動車組立ラインの見学を行い、Sheilaさんは自動車が形になっていく過程や、その中で従業員がどのような作業をしているかといったことを熱心に見ていた。



工場見学の様子

(3) 文化体験

フィリピンは一年を通して気温が高いこともあり、乾季と雨季の区別しかない。そのため、日本の四季を感じてもらう目的で豊田市の香嵐渓を訪れ、紅葉を見てもらった。また、着付け体験も行い、はじめのうちは慣れない着物や下駄、日本髪に若干戸惑い緊張していたが、慣れてくると笑顔で写真撮影をするなど喜んでる様子だった。

着付け体験の様子



香嵐渓での紅葉観賞の様子



② 支援物資の収集

1/29～2/21の期間、学内で支援物資の収集を行った。古着や文房具を中心に、使わなくなったものや家で余っているものを支援物資として持って来ていただけるように呼びかけた。

支援物資収集のピラ



3. 成果

① フィリピン人大学生の招聘

講演会には、教職員や学生ら 70 名以上の方に参加していただくことができました。講演会参加者からは、「貧困問題について、直接 Sheilaさんから話が聞けたことは意義深かった」「スラムで暮らす子どもたちに笑顔が溢れているというのは想像と全く違った」といった声を多くいただいた。Sheilaさんから現地のリアルな状況を多くの方に伝えていただけたことで、支援の輪を広げていくうえで第一の段階である「現状を知ってもらう」というところを達成できたといえる。

また、工場見学や文化体験をするなかで Sheilaさんに日本について理解を深めてもらうことができました。幼いころから CEC のサポートを受けてきた Sheilaさんにとって、日本人は身近な存在であったが、日本という国自体はどのような場所なのか詳しくは知らない「遠い」存在であった。今回実際に日本に来て、さまざまな経験をしたことで日本をより身近なものに感じてもらうことができたと考えられる。

② 支援物資の収集

160サイズの段ボール10箱分の支援物資が集まった。なかでも、Tシャツやジャージなどの古着や履かなくなった靴が多く寄せられた。これらは、サイズが合わない服を着ていたり、着るものがなかったりす

ることが頻繁にある山村集落の人たちに対する生活面での支援になる。また、鉛筆やボールペンなどの文房具も集まったため、子どもたちが教育を受ける環境を整えるという意味合いでの支援をすることもできる。

物資を提供していただいた学生の多くが「自分が使わなくなったもので手軽に支援ができることに驚いた」という言葉を口にしていた。こういった言葉から、機会があれば支援に協力してみたいという思いを抱いていても、実際には自分がどのような形で協力できるのかということを知らないためにこれまで支援活動に参加しなかった学生が多くいたものと考えられる。そういった学生たちに、支援は決して特別なものではなく、誰でも参加が可能な活動であることを知ってもらうことができたのではないか。

4. 今後の展望

(1) 今年度の活動に関して

集まった支援物資については、今年度多文化体験活動で3月にフィリピン・セブ島を訪問する学生たちの手で山村集落の人たちに届けてもらうことにしていたが、多文化体験活動が中止となり、別途対応を検討している。

支援物資仕分けの様子



集まった支援物資



(2) 来年度以降の活動に関して

「今、もっとも必要としているものは何か」を Sheila さんに尋ねたところ、「安心して暮らすことのできる家が欲しい」という返答があった。この答えからも分かるように、私たちに貧困問題の根本的な解決をすることは難しい。しかし、支援は継続していくことに意味がある。すぐに状況を変えることはできなくとも、ひとりひとりが支援をしていくことで結果として大きな変化をもたらすことができるかもしれない。今後も私たちにできる活動を、できる範囲で続けていくことでさらに支援の輪を広げていきたい。

具体的な新たな取り組みとしては、愛知教育大学とフィリピンの山村集落をライブ映像で繋ぎ、深く知りたいことや疑問に感じることを複数の現地の人に直接尋ねることができるような場を設けたいと考えている。より多くの「リアル」な声を聞くことで、支援の輪を広げるうえで必要不可欠な「現状を知る」という段階の活動内容をより意味のあるものにしていきたい。

5. 決算

予算：400,000円，残額：95,228円

費目	支出額
○ 備品 (支出なし)	0円
小計	0円
○ 消耗品 A4用紙	1,633円
小計	1,633円
○ 旅費 フィリピン人大学生招聘費用(謝礼等含む)	250,806円
学生交通費(トヨタ工場)	16,330円
小計	267,136円
○ 謝金 (支出なし)	0円
小計	0円
○ その他 セミナーハウス利用料	23,100円
布団利用料	12,903円
小計	36,003円
合計	304,772円

6. メンバー

番号	学年	氏名	所属
1	3	川崎 拓実	保健体育
2	3	福岡 凌	保健体育
3	3	竹内 聡汰	保健体育
4	3	田中 亜実	保健体育
5	3	松内 紗也香	保健体育
6	3	加藤 妃奈子	養護教諭
7	3	桑野 奈津美	養護教諭
8	3	伊藤 くるみ	心理
9	3	永岡 栞	福祉
10	3	高橋 佑奈	福祉
11	教員	小倉 靖範	
12	事務	柴山 麻衣	